

国際商事仲裁模擬裁判

明治学院大学教授 吉野 一

第13回Willem C. Vis国際商事仲裁模擬裁判(Vis Moot)の口頭弁論が、2006年4月6日から13日まで、ウィーンで開催された。私は、同僚の加賀山茂教授と学生(法科大学院生と研究者養成課程の大学院生)総勢5人と共に、これに参加してきた。私自身の参加は8回目になる。今年は世界各国から全部で156校が参加した。国別では一番多いのが、米国で37校、次がドイツで19校、日本からは今年も明治学院大学1校であった。参加者は、国により大学院生または学部学生と異なるが、基本的には実務家志望の者たちである。

Vis Mootは国連動産売買契約法(United Nations Convention on Contracts for the International Sale of Goods)を主たる適用法とする国際商事仲裁模擬裁判である。模擬裁判競技自体は、口頭弁論の6ヶ月前に始まる。今回は2005年10月初旬にVis MootのWebサイト(<http://www.cisg.law.pace.edu/cisg/moot/mootlist.html>)に問題(Problem)が掲載されることにより始まった。問題は、仲裁法廷に提出された記録から成る。50頁程度の量である。記録は、申立人の代理人と仲裁機関との書面のやりとりから始まり、仲裁申立書や答弁書、関係する書証、代理人と仲裁機関との間でやりとりされた書面などからなる。今年の問題は、菓子包装紙の中古の印刷機の売買に関する購入希望と納入物品のミスマッチに起因する係争であり、交換された12通のビジネスレターが書証として登場し、それらが、各論点に関して申立人と被申立人とで異なって解釈できるようになっている、例年通りのリアルな事例である。

問題に対する質問が11月初旬まで受け付けられ、その質問に基づいて問題の補足説明(clarifications)が提示される。これも問題の一部となる。

続いて、各校は、12月初旬までに申立人(原告)

の準備書面(Memorandum for Claimant)を作成し、仲裁模擬裁判の主催者であるEric Bergsten教授宛に提出する。申立人の準備書面が口頭弁論の第1回で対戦する相手校に転送され、また、評価のために審査委員(4名)に転送される。各校は送られてきた準備書面に基づいて、被申立人(被告)の準備書面(Memorandum for Respondent)を作成し、これを翌年の1月末までに本部に送る。

二つの準備書面を作成する過程が、学生にとっては大いなる学習の機会である。参加する全学生が毎日遅くまで大学に残って、法情報を調査し、論点を整理し、論理構築を工夫し、説得力のある準備書面を作成していく。その過程で、学生は、例えば、契約の内容を、上述の書証から、依頼人に有利に論証しようとする。同一の問題について申立人と被申立人の二つの立場から法律構成を行わなければならないのは、教育上の配慮に基づく。

このような準備作業を経て、イースター休暇の前半(今年は上述のように4月6日から13日)に参加全校がウィーンに一同に会して、口頭弁論を行うのである。

開会式は、古式ゆかしき劇場(Konzerthaus)で7日夜、行われた。開会式に続いて行われるレセプションで、全世界から集まった学生、教師、仲裁人が最初の交流の時を持つ。昨年の模擬裁判で、親しくなった人たちとの再会の場でもある。

口頭弁論は、予選(general round)と、決勝(elimination round)から構成される。予選ラウンドでは、各校とも、申立人の代理人として2回、被申立人の代理人として2回、計4回、口頭弁論の機会が与えられる。これら口頭弁論において、代理人役を務める学生のプレゼンテーションが仲裁裁判官に採点され、チームごとに得点が集計される。

各口頭弁論の仲裁裁判官は3人で、Chairmanも

しくはPresidentと呼ばれる裁判長によって進められる。仲裁裁判官団は、仲裁裁判の経験のある判事や弁護士あるいは大学教授が、世界からボランティア（無報酬で）に集まって構成されている。口頭弁論の持ち時間は各校30分程度与えられる。仲裁裁判官の質問は事実に関する質問が多い。「このような事実があるが、それは何ら意味を持たないのか」、「その主張はどのような証拠から認定できるのか」という具合に。弁論が終了すると仲裁裁判官らは採点のための会議に入る。その後、学生は仲裁人から口頭弁論について講評を受けることができる。

予選ラウンドが終わると、決勝トーナメントに進む32校が選出され、発表される。翌日から、勝ち抜き戦の決勝トーナメントが、休む間も無く続く。傍聴人も多くなり、高いレベルの弁論が展開される。

決勝戦は、国際会議センターの大ホールで行われる。参加者全員が見守る中、勝ち残った2チームが最後の模擬裁判に挑む。決勝戦に続いて、晩餐会が催され、その中で表彰式が行われる。今年はイギリスのQueen Maryが優勝校、アメリカのStetson Universityが準優勝校となった。表彰式では、口頭弁論の優勝校の発表のみならず、口頭弁論で優秀な成績を上げた学生十数人、また準備書面で高得点を獲得した大学チームが表彰される。これら表彰もまた印象深い。表彰された学生、学校は歓声をあげて喜ぶ。それを横目に、悔しさを噛み締める者も多い。それもこれも晩餐会のワインの香りとともに昇華して、参加者すべてが充実感と幸福感に満ち溢れる。

以上がVis mootの全体の流れである（私たちのVis Moot参加の詳細は、私のWebサイトを参照：<http://www.meijigakuin.ac.jp/~yoshino/>）。

本模擬裁判の特徴として、教育上の配慮が行き届いていることが挙げられる。口頭弁論のみならず、準備書面にも必ず講評がつく。また大会が終了後、3週間ほどで、参加学生の個人ごとの成績と、チーム全体の評点と、それが全体のどれくらいのところにあるかを知らせてくれる。ちなみに、明治学院大学は、本年は、大分上がって、156校中102位の成績を修めることができた。この国際模擬裁判は、一面で、コンペティションの性格を有するので、成績の善し悪しは気になるところである。しかし、ベストを尽くした学生からすれば、自ら手にした経験と、専門家からの客観的な講評とを通して、自分の力を大きく伸ばす絶好の契機を得たことになる。



本大会のもう一つの特徴は、それが国際的な人脈形成の場であるということである。口頭弁論では激しく競い合うが、終われば親しい友となる。ボランティアで参加している仲裁裁判官は、口頭弁論終了後も親しく指導してくれる。毎夜、各種パーティが企画されている。最後の夜のFarewell Partyでは、ディスコを借り切って、夜通し踊りまくることになる。このような環境の下、参加する学生たち、教授たち、実務法律家たちとの、人脈を築いていくことができるのである。国際結婚をし、二世を連れて仲裁裁判官として再びVis Mootを訪れる学生もいるという。

さて、学生諸君は、この模擬裁判に参加することは面白そうだが、準備に時間とエネルギーを必要とするので、ひょっとして、司法試験に合格するのに不利になるのではないかと考えるかもしれない。しかし、そうではない。英語の能力は必要とするが、その制約さえ克服できれば、細部まで現実に即しよう構成された長文の事件資料にもとづき、原告および被告の両サイドから法律構成とその表現力を競うVis Mootは、新司法試験に合格する能力を養うためにも最良の方法である。さらに、試験に合格できるばかりでなく、グローバル化社会に活躍できる優れた法律家となるための学力と語学力と、国際的センスと人脈とを築くことができるのである。

私は、もっと日本の学生諸君がこのVis Mootに参加してくれたらなあ、いつも思っている。Vis Mootへの参加は多大な労力を伴うが、その労力は、大いなる喜びとなって返ってくる。日本の学生の皆さんの国際模擬裁判への積極的参加を期待したい。志ある諸君を私は待っている。（よしの・はじめ）